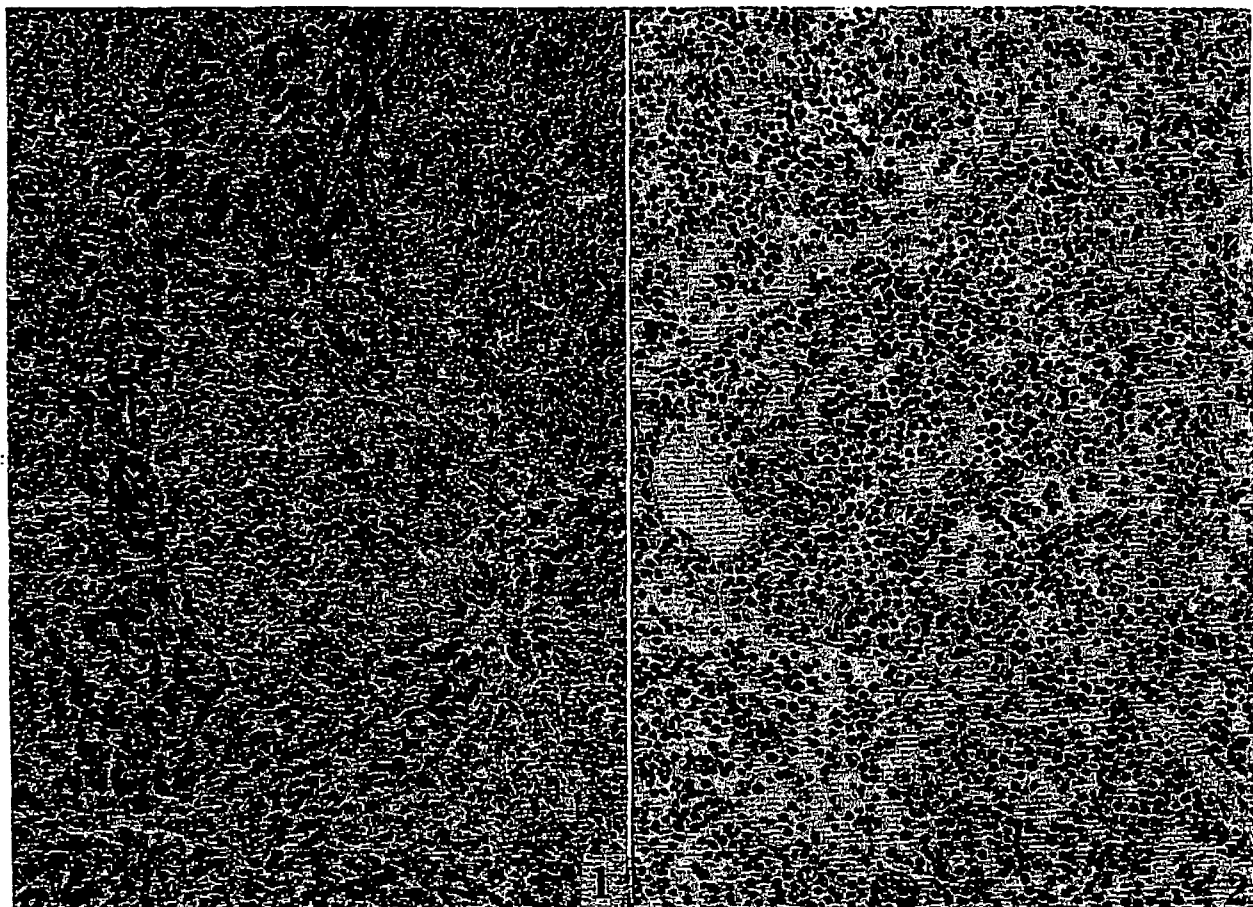


積 の リ ン パ 性 白 血 病

帯広畜産大学家畜病理学教室出題 第8回獣医病理学研修会 標本 No. 105



臨床的事項、生後4.5ヶ月の牝犢、斃死1ヶ月前に体表各部リンパ節の腫脹を發見。畜大入院。元氣減退削皮し、被毛粗剛、可視粘膜、眼結膜は貧血性かつ浮腫性、呼吸音粗れい努力性呼吸を示し、弱脈で心悸亢進、腹囲やや膨満、第一胃蠕動やや沈静、軟便を排す。体表リンパ節いづれも腫脹(3cm—手拳大)硬固で弾力性にとみ熱感なく圧痛あり。P.89 T.39.4 A.32、血液検査の結果、R.482万 W.82,200特に白血球が異常で各種の検査からその96%がリンパ系細胞でしめられ、大型リンパ球が主でリンパ芽球、異型リンパ球、大中のリンパ球像が確認されたのでリンパ白血病と診断し、Dexamethazoneの投与治療を開始した。治療開始6日目で諸症状は好転し特に体表リンパ節の大きさはほぼ半減程度に腫脹が減退。R.394万 W.3,600となつたので治療を止めた。ところが治療停止後再び症状は悪化し、19日目に起立不能、食欲廃絶、心音微弱、P.50 T.37.2 R.446万 W.33,800となり斃死した。

肉眼的所見、1)全身リンパ節の腫大、特に体表、内臓リンパ節の著しい腫大および出血、壊死巣。2)肋間筋における同様腫瘍病巣の転位。3)肝の腫大と肝包膜下、小葉間における腫瘍病巣の密発。4)腎、肺、扁桃腺における同様腫瘍病巣の存在。5)腸管粘膜のリンパ節の腫大。6)脾の腫大。

組織学的所見。a)肝。グ氏鞘および小葉内にリンパ性細胞の繁殖巣を形成している(写真-1)。そのためにグ氏鞘は広くなり、びまん性に小葉内に広く侵入している。

小葉内では結節状をしているが拡張したジューヌスオイドおよび脈管内にも流出している。そのためにグ氏鞘では胆管は圧迫され実質は萎縮的で星芒細胞の活性化はみられない。リンパ性細胞の大部分は大型のもので、核はリンパ球に比して淡明で大きく類円形または不整楕円形の中には嚙入するものもある。原形質は淡明であるが核の周囲に明らかに認めることが出来る。好銀線維はこの細胞群を小集団状に取り囲んでいるが、細胞が個々に線維に固着している所見はない。b)リンパ節。系統的腫大を示した全身リンパ節は一律にリンパ性細胞の海と化し、細胞の変性崩壊像が目立ち、本来のリンパ節の構造は認め難いが、わずかに髓索および拡張血管が認められる(写真-2)。好銀線維はこれら髓索および血管壁には連続性に認められるが、肝の様に細胞群を小集団状に囲んでいる所見はなく断裂的である。

これは治療の影響と腫瘍細胞の増殖の速さを物語る所見であろう。細胞の種類は肝におけると同様である。なお標本の位相差顕微鏡所見ではこれらの大型リンパ性細胞はリンパ胚球、リンパ芽球、大リンパ球、異形リンパ球などのリンパ胚球系細胞像が観察される。

組織学的診断。本例は概略的には牛の悪性リンパ腫症のカテゴリーに属するものであろうが極めて著明な血液変化を伴い、転移巣を作つた悪性のもので臨床的にも急性経過をたどつたリンパ性白血病と診断される。

(写真-1:×76, 写真-2:×120, いずれもH. E. 染色)